

学術大会の開催にあたって

日本顎口腔機能学会第 70 回学術大会 大会長

山口泰彦

(北海道大学大学院歯学研究院口腔機能学分野
冠橋義歯補綴学教室 教授)



この度、日本顎口腔機能学会第 70 回学術大会の大会長を務めさせていただきます。

ご存知のように本会は 1982 年に下顎運動機能と EMG 研究会としてスタートし、その後、1986 年に顎口腔機能研究会と改称し、1993 年に日本顎口腔機能学会として発足しております。研究会のスタート時には大会は年に 3 回ずつ行われており、学会となった後も年 3 回開催はしばらく続いていました。その後、現在のように年 2 回の開催となり、本年は発足 30 年目で、学術大会としては今回が 70 回目となります。個人的には、ちょうど 70 回の半分に当たる 2005 年の第 35 回大会に続いての 2 回目の大会長の機会を与えていただきました。その 18 年前の大会では、一般口演の演題の内容として、咀嚼、嚥下、発語、咬合力、咬合器シミュレータ、顎運動シミュレータ、咬合接触、咀嚼運動経路、中耳機能、クレンチング、スプリント、筋活動など多彩なテーマで発表がありました。今回、70 回大会でも皆様から多数の演題のご発表をいただき、本学会の伝統であります 1 演題当たり発表 15 分、質疑応答 15 分というディープな時間を沢山共有できることを期待しています。

企画講演としては、「咬合力:その実態解明の軌跡と展望」をテーマとして、服部佳功先生(東北大学大学院歯学研究科加齢歯科学分野)、志賀 博先生(日本歯科大学生命歯学部歯科補綴学第 1 講座)、依田信裕先生(東北大学病院咬合回復科)、土方 亘先生(東京工業大学工学院機械系)の 4 人の講師の先生をお迎えしてシンポジウムを行います。咬合力の発揮は、顎口腔機能の最もエッセンシャルな要素と考えられます。本学会では、これまで、その実態解明と検査機器の臨床での活用において多大な実績を残してきました。一方で我々はその全貌を測り知る万能の術を持っておらず、解明すべき未知の部分が多く残されているのも事実です。そこで、今回、これまで解明されてきた咬合力の実態を整理するとともに、さらなる解明への課題と可能性についてディスカッションできればと考えています。

また、シンポジウム、一般口演に加え、学術大会優秀賞受賞者の方々による企画も予定しており、充実した 2 日間となるものと思われま。

会場は北海道大学学術交流会館で、札幌駅から徒歩 10 分とアクセスの良いところです。是非とも、多数の皆様にご参加いただきますようお願い申し上げます。

2023 年 6 月